

Ensemble 14  
第9回演奏会

*Dirigieren*

2004年9月19日(日) 14:30開演  
横浜みなとみらいホール 小ホール

横浜では2度目(3回目かな!?)のアンサンブル14の演奏会です。結団以来、バッハのカンタータを中心に、ヨハネ受難曲、マタイ受難曲(合同演奏)、モテット、小ミサ曲とバッハの作品ばかりを取り上げて参りました。

今回はカンタータの中でも名曲中の名曲!復活祭のために書かれた第4番を取り上げます。もう一曲のカンタータは第6番。二人の弟子が復活したキリストに、この世に留まってくれるように請い願う様の描写が見事です。

後半はドイツ語訛りでミサをお楽しみ頂きます。

私事ですが、私、友人たちとの共著に、ローマカトリックの発音に準じたラテン語の読み方のCDブックがあるので、なかなかこのドイツ語訛りに踏み切れなかったのです。ラテン語もドイツ語も母国語でない日本人が、ラテン語で書かれたミサ曲を、わざわざドイツ語訛りで歌うことに果たしてどれほどの意味があるのかと疑問に思われる方も多いこと存じます。私もずっとその一人でした。

しかし、何度か練習してゆくうちに、冒頭のバスパートの緩んだ発音がどうしても許せなくなったのと同時に、芸大バッハカンタータクラブで、小林道夫先生ご指導のもと歌った事のあるこのミサ曲のサウンドが頭に鳴り出しました。そうしたらもう駄目です...やってみたくなくなっちゃいました。小林先生は由布院にいらっしゃるし、「私はそんな風には指揮した覚えはありませんよお...」なんて言われることも無かろうとチャレンジしてきたのですが...

実は他の団体で只今やはりバッハの口短調ミサ曲を練習中で、そちらはローマカトリックの発音の流れに沿う発音で演奏する事を断言してしまっておりましたので、指導しつつ何度もコンフューズ致しました!

でもね、私思うんです!世界中でも発音の揃った合唱団はそれ程多くないけど、意味を解からずにミサを歌う人は、我が国を除いてそう多くは無かろうと、意味あいの解釈に力を注いだつもりです。(スンゴイ言い分け文!!)

さて、「結局日本語訛りだったねえ...」なんて恐ろしいご批評を頂かぬよう頑張りますので、どうぞ最後までお楽しみください!

そうそう、因みに前述のCDブックは「わかって歌おうシリーズ」なんて人を食ったような副題がついておりましたっけ...

さて、次回は来年の秋にマタイ受難曲を初めてアンサンブル14単独で演奏する予定です!ソリストもエヴァンゲリスト、イエス、ピラト以外は今回同様、団員で賄います!

皆さんもそんなとこで聴いてないで、どうぞ舞台で一緒にしましょう!!

指揮者 辻 秀幸



## プログラム



作曲 ヨハン・ゼバスティアン・バッハ  
Johann Sebastian Bach (1685-1750)

カンタータ4番 『キリストは死の縄目につながれたり』  
Kantaten Nr.4 “Christ lag in Todes Banden” BWV4

(3) 室橋 明美[S]、河野 昭子[A]、(4) 中西 隆紀[T]  
(6) 三浦 貴博[B]、(7) 北郷 博美[S]、室橋 義明[T]

カンタータ6番 『われらと共に留まりたまえ』  
Kantaten Nr.6 “Bleib bei uns, denn es will Abend werden” BWV6

(2) 木下 祐子[A]、(3) 浜崎 麗子[S]  
(4) 木下 剛[B]、(5) 江端 員好[T]

休 憩

ミサ曲 ト長調  
Messe in G-Dur BWV 236

(3) 武内 崇史[B] (4) 崎谷 芳恵[S]、湊 佳代[A]  
(5) 内藤 秀司[T]

指揮 辻 秀幸  
管弦楽 Millennium Bach Ensemble  
声 楽 Ensemble14

## カンタータ 第4番 『キリストは死の縄目につながれたり』 Kantaten Nr.4 “ Christ lag in Todes Banden ” BWV4

用途 :復活節第1日

成立 :1708年以前

福音書:マルコ16,1-8(キリストの復活)

歌詞 :M.ルターのコーラル「キリストは死の縄目につながれたり」全節

定旋律:BWV277

M.ルターの同名コーラル全節を歌詞としている、バッハ初期のカンタータ。初期作の中では珍しく、全曲にわたりコーラルがちりばめられている。復活節をキリストの受難に立脚したものとして、あらためて受難を回顧するルターの受難観に基づき、音楽は喜びよりもむしろ厳肅な様相を呈している。第5曲(コーラル第4節)を中心とした対称構造やテキストに密着した音楽など、バッハ特有ともいえるべき特徴も姿をみせ、作品の説得力を高めている、現存するバッハのカンタータの中でも記念碑的といえるべき銘品である。

### 第1曲 シンフォニア

コーラル旋律よりとられた「死」を暗示する半音下降がカンタータの開始を告げる。半音下降を繰り返したのちコーラル旋律が姿をあらわし、終始失われぬ厳肅さのなか曲が閉じられる。

### 第2曲 コーラル第1節 合唱

コーラル定旋律をソプラノが歌う中、他声部がテキストにそって装飾を加える。キリストの「死」からの「復活」を歌詞が告げると音楽は盛り上がりを見せ定旋律以外の声部に活気に満ちた十六分音符が多用されるようになる。抑えきれぬ歓喜を示すかのようにalla breveを迎え、四声が口々にハレルヤを繰り返す。

### 第3曲 コーラル第2節 二重唱(ソプラノ、アルト)

人々の罪によって、「死」が人々を支配した事をソプラノとアルトが歌う。繰り返される半音下降ときしむような不協和音が、「死」と人々の嘆きをあらわしているかのようである。

### 第4曲 コーラル第3節 独唱(テナー)

十六分音符を奏でるヴァイオリンが事態の急転を告げる中、イエス・キリストの来臨というテキストを携えて、テノールがコーラル定旋律を歌う。「死」が力を奪われ形ばかりのものとなる場面ではヴァイオリンがしばし激しい動きを控え、印象的なアダージオが形成されるが、すぐにアレグロとなり、ハレルヤを連呼して曲が閉じられる。

### 第5曲 コーラル第4節 合唱

対称構造の中心をなす合唱。「生命」と「死」の驚くべき戦い、「生命」の勝利、そして聖書の成就という、テキストに密着した音楽がカノンで展開される中、アルトが力強く定旋律を歌いきる。

### 第6曲 コーラル第5節 独唱(バス)

受難を心にとどめ、信仰によってのみ私達が救われる事をバスが重く、そして厳肅に歌う。信仰をつきつけられた「死」にわりあてられる重々しい低音、「殺害者」にわりあてられる張り詰めた高音や繰り返される「nicht」が印象的である。

### 第7曲 コーラル第6節 二重唱(ソプラノ、テナー)

はずむようなコンティヌオの動きが清しさをえ感じさせるような喜びをあらわし、ソプラノとテノールが主によって輝きを得た「いと高き祭」を喜ばしく歌い、主を讃美する。もはや罪の夜が過ぎ去った事を示すかのように、コンティヌオは付点のリズムを刻み続ける。

### 第8曲 コーラル第7節 合唱

これまで陰に陽に、様々な変奏を施されてきたコーラルが、四声体間奏なしの簡潔なたちで明確に姿をあらわす。共同体レベルで信仰にいきる事を宣言し、力強くカンタータをしめくくる。

## 2. Versus 1

Christ lag in Todes Banden  
für unsre Sünd gegeben,  
er ist wieder erstanden,  
und hat uns bracht das Leben.  
Des wir sollen fröhlich sein,  
Gott loben und ihm dankbar sein,  
und singen halleluja, Halleluja.

## 3. Versus 2 (Soprano, Alto)

Den Tod niemand zwingen kunnt  
bei allen Menschenkindern;  
das macht' alles unsre Sünd,  
kein Unschuld war zu finden.  
Davon kam der Tod so bald  
und nahm über uns Gewalt,  
hielt uns in seinem Reich gefangen.  
Halleluja.

## 4. Versus 3 (Tenore)

Jesus Christus, Gottes Sohn,  
an unsre Statt ist kommen,  
und hat die Sünde weggetan,  
damit dem Tod genommen,  
all sein Recht und sein Gewalt;  
da bleibet nichts denn Tods Gestalt.  
den Stachel hat er verloren. Halleluja.

## 5. Versus 4

Es war ein wunderlicher Krieg,  
Da Tod und Leben rungen,  
das Leben da behielt den Sieg  
es hat den Tod verschlungen.  
Die Schrift hat verkündigt das,  
wie ein Tod den andern fraß,  
ein Spott aus dem Tod ist worden.  
Halleluja.

## 6. Versus 5 (Basso)

Hie ist das rechte Osterlamm,  
davon Gott hat geboten,  
das ist hoch an des Kreuzes Stamm,  
in heißer Lieb gebraten.  
Das Blut zeichnet unser Tür,  
das hält der Glaub dem Tode für  
der Würger kann uns nicht mehr schaden.  
Halleluja.

## 7. Versus 6 (Soprano, Tenore)

So feiern wir das hohe Fest,  
mit Herzensfreud und Wonne,  
das uns der Herr erscheinen läßt.  
Er ist selber die Sonne,  
der durch seiner Gnaden Glanz,  
erleuchtet unsre Herzen ganz.  
der Sünden Nacht ist verschwunden.  
Halleluja.

## 8. Versus 7 Choral

Wir essen und leben wohl  
in rechten Osterfladen;  
Der alte Sauerteig nicht soll sein  
bei dem Wort der Gnaden.  
Christus will die Koste sein  
und speisen die Seel allein,  
der Glaub will keins andern leben.  
Halleluja.

## 2. コラール第1節 合唱

キリストは「死」にとらわれました、  
私達の罪の償いとして引き渡されたのです。  
しかし彼は再び復活され、  
そして私達に「生命」をもたらして下さいました。  
それを私達は喜びましょう。  
神を称賛し、そして感謝しましょう。  
そしてハレルヤを歌いましょう。ハレルヤ！

## 3. コラール第2節 二重唱(ソプラノ、アルト)

誰も死を追いやる事ができませんでした、  
全ての人の子にあっては。  
それは全て私たちの罪がひきおこしたものであり、  
無実の者は見つからなかったのです。  
そのことから死はずぐさまやって来て、  
そして私達を支配し、  
私達を死の国に捕らえつづけたのです。  
ハレルヤ！

## 4. コラール第3節 独唱(テナー)

イエス・キリスト、神の子であるそのお方が、  
私達の代わりにやって来て下さって、  
そして罪を捨てさせて下さったのです。  
それにともなって死は奪われたのです、  
全ての律法と権力を。  
死はもはや形ばかりのものとなり、  
そのとげを失ったのです。ハレルヤ！

## 5. コラール第4節 合唱

奇異な戦争がおこり、  
「死」と「生」が闘いました。  
「生」は勝利をおさめ  
「死」をかき消しました。  
聖書が告げたのです、  
「ひとつの死」が他の「死」を侵食する、と。  
それゆえに「死」は嘲笑を受けたのです。  
ハレルヤ！

## 6. コラール第5節 独唱(バス)

ここに真の過越の小羊があるのです、  
神が約束なさった。  
十字架の幹高くにあって、  
熱い愛の火に燃やされるのです。  
その血は私達の家戸口に印しをつけ、  
信仰はそれを放さずに死と対峙するのです。  
もはや殺害者も私達を傷つけることはできないのです。  
ハレルヤ！

## 7. コラール第6節 二重唱(ソプラノ、テナー)

さあ、私達はこのいと高き祭を祝いましょう、  
心からの喜びと大きな幸せを感じて。  
主はこの祭に輝きを与えて下さったのです。  
主は太陽そのものであり、  
恵みの輝きで私達の心を、  
完全に照らして下さいます。  
もはや罪の夜は過ぎ去ったのです。  
ハレルヤ！

## 8. コラール第7節 合唱

私達は食べそしてよく生活を営みましよう、  
真の過越のパンによって。  
古いパン種は存在してはいけません、  
恵みのみことばのそばに。  
キリストは自ら糧となられ、  
そしてひとり魂を養われるのです。  
信ずることによってのみ信仰はいきてゆくのです。  
ハレルヤ！

カンタータ 第6番 『われらと共に留まりたまえ』  
Kantaten Nr.6 “ Bleib bei uns, denn es will Abend werden ” BWV6

初演:1725年4月2日 ライプツィヒにて

用途:復活祭第2日

題名を含む冒頭曲の短いテキストは、新約聖書のうち「ルカによる福音書」第24章29節から。十字架にかけられたイエス・キリストが甦ったらしいという噂話をしながら歩く2人の弟子(生前のイエスに実際に接したことのない、末端部の弟子と思われる)の前に、キリストの預言を説く人物が現れる。只人ではないと感じた2人は、夜も近いことから、夕食を一緒にするよう勧める。夕食の席上、その人がパンを祝福して裂く姿を見て、2人は彼がイエスその人であることを悟るのだった。

この題材を基に、罪深い世にあって、イエスのみを希望の灯としてすがり、迷うことのないよう常に見守っていてほしいと懇願する信者の思いが歌われていく。

#### 第1曲 合唱

荘厳で劇的な前奏は、日が落ちる前の燃えるような夕映えの情景を表すかのようである。ひたすら繰り返される「留まってください、もう日が落ちますから」という歌詞は、本来の意味から、イエスを唯一の拠り所として希う信者の祈りへと昇華していく。

#### 第2曲 アリア(アルト)

前曲とは変わって、明るく伸びやかな旋律で神を讃える言葉を歌い始めるが、後半はややトーンを落とし、迫り来る暗闇を前に、イエスに留まってほしいと願う。Bleib(留まれ)という単語が、長く引き伸ばす旋律によって表現されている。

#### 第3曲 コラール(ソプラノ)

絶え間なく動く弦の伴奏に乗って歌われる、ソプラノの清澄なコラール。敬虔な信者がイエスの死に際して、または自身が死に臨む時に捧げた祈り—— 筆者はそんな印象を受けた。この信徒には、おそらくずっと明るい光が見えていたのではないだろうか？

#### 第4曲 レチタティーヴォ(バス)

急激に広がる暗闇。それは人が自ら犯した罪によってもたらされたものだった。神に見放されたくなければ悔い改めよ、という戒めを暗に含み、バスが厳しい調子で語る。

#### 第5曲 アリア(テナー)

暗闇の中、イエスに再び姿を現し光を与えてくれるよう、痛切に訴えるアリア。前奏冒頭のヴァイオリンと、歌い出しのテナーの音型(G-D-B-Fis)は、十字架を表現するものである。

#### 第6曲 コラール合唱

全員で改めてイエスへの懇願を歌う。最後に和音が明るくなり、信者のイエスへの揺るぎ無い信頼と、希望を感じさせて歌い終える。

1. Coro

Bleib bei uns,  
denn es will Abend werden,  
und der Tag hat sich geneiget;

2. Aria (Alto)

Hochgelobter Gottessohn,  
laß es dir nicht sein entgegen,  
daß wir itzt vor deinem Thron  
eine Bitte niederlegen,  
Bleib, ach bleibe unser Licht,  
weil die Finsternis einbricht.

3. Choral (Soprano)

Ach bleib bei uns, Herr Jesu Christ,  
weil es nun Abend worden ist,  
dein göttlich Wort, das helle Licht,  
laß ja bei uns aus löschen nicht.

In dieser letzt'n betrübten Zeit  
verleih uns, Herr, Beständigkeit,  
daß wir dein Wort und Sacrament  
rein b'halten bis an unser End.

4. Recitativo (Basso)

Es hat die Dunkelheit  
an vielen Orten überhand genommen.  
Woher ist aber dieses kommen?  
Bloß daher, weil sowohl die Kleinen  
als die Großen  
nicht in Gerechtigkeit vor dir, o Gott,  
gewandelt und wider ihre Christenpflicht gehandelt.  
Drum hast du auch den Leuchter umgestoßen.

5. Aria (Tenore)

Jesu, laß uns auf dich sehen,  
daß wir nicht auf den Sündenwegen gehen.  
Laß das Licht deines Worts uns helle scheinen  
und dich jederzeit treu meinen.

6. Choral

Beweis dein Macht, Herr Jesu Christ,  
der du Herr aller Herren bist;  
beschirm dein arme Christenheit,  
daß sie dich lob' in Ewigkeit.

1. 合唱

私たちのもとにお留まりください。  
じきに夜が来るでしょう、  
日が傾いてしまいましたから

2. アリア(アルト)

大いに賛美される神の子よ、  
御身を背けないでください。  
今、貴方の玉座の前に  
願いを捧げている私達から。  
留まってください、ああどうか、私達の光である方よ。  
暗闇が訪れようとしているのですから。

3. コラール(ソプラノ)

ああ、私達のもとに留まってください、主イエス・キリストよ。  
もはや、夕暮れとなりましたから。  
貴方の神聖なる御言葉、その明るい光を  
私達のそばから、どうか消し去らないでください。

この最期の悲しみの時に、  
私達にお与えください、主よ、不変なるものを。  
私達が、貴方の御言葉と秘蹟とを  
この身の最期まで、穢すことのないように。

4. レチタティーヴォ(バス)

闇は多くの場所で急激に広がった。  
だが、どこからこれらはやって来るのか？  
それはひとえに、小さき者も、  
大いなる者も、  
貴方の正義によって歩まず、おお神よ、  
彼らのキリスト者の務めに背く行いをしたからに  
他なりません。  
それゆえに、貴方もまた燭台を倒して火を消されたのです。

5. アリア(テナー)

イエスよ、私達に貴方を仰ぎ見させてください。  
そうすれば私達は罪の道へ進むことはないのです。  
貴方の御言葉の光を、私達に明るく輝かせ、  
貴方を、変わることなく忠実に慕わさせていただきます。

6. コラール 合唱

示してください、貴方の力を、主イエス・キリストよ、  
全ての主の主であられる方よ。  
お護りください、貴方のあわれなキリスト者達を、  
そうすれば彼らは貴方を永遠に賛美し続けることでしょう。

# ミサ曲 ト長調

## Messe in G-Dur BWV 236

初演:1738/39年頃 ライプツィヒにて

ミサ通常文の中でKyrieとGloriaに曲付けされたBWV233～236の4曲のミサは、カンタータ風ミサ曲とも呼ばれ、バッハの作曲したミサ曲の中で明確にひとつのグループを形成している。本曲も、他の3曲と同様に歌詞が数行ずつ区切られ、また各部分がカンタータと同様に独立した楽章となっている。曲の構成についても他の3曲と同様に、Kyrie、Gloriaの冒頭が合唱曲となっている。Gloriaの歌詞の中間部は3つに区分され、それぞれ独唱、または二重唱アリアとして曲づけがされており、しめくりについても他の3曲と同様にCum Sancto Spirituの歌詞に曲づけがされている。また、この4つのミサのほとんどすべての楽章が教会カンタータのパロディ(既作の声楽曲の歌詞を差替えたり、音楽を書き直したりすること)となっている点も特徴的である。

### 第1曲 合唱

カンタータ第179番(1723年8月初演)の冒頭合唱曲を原曲とする。穏やかな曲調で心が安らぐ旋律である。Kyrieで始まる主題とChristeで始まる主題が何度も交錯する。フレーズの重なり合いがとても美しい。

### 第2曲 合唱

カンタータ第79番(1725年10月初演)の第1曲を原曲とする。冒頭の女声合唱によるGloria(この旋律は、原曲では前奏に充てられている)は心躍るような聴き手の心をつかむ旋律である。Laudamus teからは一転、軽快で派手な音楽が展開する。指揮者、合唱ともヒートアップしがちで、演奏会当日の暴走がいささか気懸かりである。

### 第3曲 アリア(バス)

カンタータ第138番(1723年9月初演)第5曲を原曲とする。Bassが神への感謝を雄大な音楽で歌い上げる。特に後半のバッセージは歌いきるのが非常に難しく、ソリスト泣かせの曲である。

### 第4曲 二重唱(ソプラノ、アルト)

カンタータ第79番の第3曲に基づく。前曲の二長調からイ短調への転調が印象的である。ソプラノ、アルトによる二重唱が大変美しく、時に重なり、もつれながら、miserere(あわれみたまえ)を歌う部分が圧巻である。

### 第5曲 アリア(テナー)

カンタータ第179番の第3曲に基づく。冒頭のオーボエの音色は聴く者を切なくさせる。唯一の主への信仰を歌うテナーと、オーボエのオブリガートの絡みがとても美しい。

### 第6曲 合唱

カンタータ第17番(1725年9月初演)の冒頭合唱曲に基づく。壮大な前奏から、一転して軽快なフーガが展開し、堂々としたAmenで終わる。

今回はひとつの試みとして、ドイツ語訛りの発音による演奏に取り組んだ。慣れない言葉回しに戸惑ったが、今回の演奏で聞きなれたラテン語のミサとの雰囲気の違いを少しでも出すことができれば、と考えている。

1. Kyrie

Kyrie eleison.  
Christe eleison.  
Kyrie eleison.

2. Gloria

Gloria in excelsis Deo,  
et in terra pax hominibus bonae voluntatis.  
Laudamus te,  
benedicimus te,  
adoramus te,  
glorificamus te.

3. Gratias ( Basso )

Gratias agimus tibi  
propter magnam gloriam tuam.  
Domine Deus, Rex coelestis,  
Deus Pater omnipotens,  
Domine Fili unigenite Jesu Christe.

4. Domine Deus ( Soprano, Alto )

Domine Deus,  
Agnus Dei,  
Filius Patris,  
qui tollis peccata mundi,  
miserere nobis.  
qui tollis peccata mundi,  
suscipe deprecationem nostram.  
Qui sedes ad dextram Patris,  
miserere nobis.

5. Quoniam (Tenore)

Quoniam tu solus sanctus,  
tu solus Dominus,  
tu solus altissimus,  
Jesu Christe.

6. Cum Sancto Spiritu

Cum Sancto Spiritu  
in gloria Dei Patris.  
Amen.

1. 合唱

主よ 憐れみをください  
キリストよ 憐れみをください  
主よ 憐れみをください

2. 合唱

天の神には栄光  
そして地上には善良な人々に望まれている平和  
私たちはあなたを称賛します  
私たちはあなたを祝福します  
私たちはあなたを崇拜します  
私たちはあなたを誉め讃えます

3. アリア(バス)

あなたの大きいなる栄光故に  
私たちはあなたに感謝します  
主なる神よ、天の王よ、  
全能の父なる神よ  
神の一人子として生まれた主よ、イエス・キリストよ

4. 二重唱(ソプラノ、アルト)

主なる神よ  
神の子羊よ  
父なる神の子よ  
人々の罪を受けてくださるあなたは、  
私たちに憐れみをお与ください  
人々の罪を受けてくださるあなたは、  
私たちの謝罪を引き受けてください  
父なる神の右に居られるあなたは、  
私たちに憐れみを与えてください

5. アリア(テノール)

あなたは唯一人の聖者  
あなたは唯一人の主  
あなたは唯一人の非常に崇高い  
イエス・キリストであるから

6. 合唱

父である神の栄光に  
聖なる精霊とともに  
真に

つじ ひでゆき  
指揮 辻 秀幸

Ensemble 14 指揮者。東京芸術大学声楽科卒業 及び 同大学院独唱科修了。

声楽を渡邊高之助、宗教音楽を小林道夫、佐々木正利の各氏に師事。1985年イタリアのミラノを中心にヨーロッパへ音楽遊学。L.グウアリーニ女史、F.タリアヴィーニ、H.リリングらの各氏に師事。

1986年イタリアのノバラ市国際声楽コンクール入賞。同年ドイツのハイデルベルク、1988・89年にはウィーン楽友協会大ホール、2000年にはカイザースラウテルン、パッサウ他、数都市でベートーヴェン“第9”のソリストを務め、ヨーロッパ各地でコンサートに出演し好評を博す。国内でもドイツ・イタリア・日本歌曲を中心に各地でユニークなリサイタル活動を展開している。オペラにも数多く出演し、その優れた演技力と歌唱は、新聞・音楽誌上でも度々絶賛された。宗教音楽の演奏家としての活躍は特に目覚ましく、バッハ・ヘンデル・ハイドンの宗教曲・オラトリオの演奏では、ソリスト・エヴァンゲリスト・また指揮者として、その活動は常に注目を集めている。

洗足学園大学及び高等学校音楽科講師、尚美学園音楽大学合唱団「匠」指揮者、ぐるーぷ・なーべ幹事、日本合唱指揮者協会理事、アンサンブルBWV2001メンバー、iARTS理事。

共著に「わかって歌おうーレクイエム発音講座」、「フィガロの結婚 発音講座」等のCDブックがある。

## 管弦楽 Millennium Bach Ensemble(ミレニアム・バッハ・アンサンブル)

2000年4月に田園調布教会で行われた「マタイ受難曲」演奏会において辻秀幸先生の呼びかけにより結成される。各方面で活躍中の若手演奏家からなる器楽団体。第2回演奏会以降、Ensemble14との共演が続いている。

第1ヴァイオリン	大西 律子	天野 寿彦	宮崎 桃子
第2ヴァイオリン	鍋谷 里香	松川 裕子	
ヴィオラ	深沢 美奈	幡谷 久仁子	
チェロ	伊藤 恵以子		
コントラバス	柳沢 智之		
オルガン	辰巳 美納子		
オーボエ	工藤 亜紀子	加勢 麻衣子	玉田 周哉
ファゴット	井上 直哉		

## 声楽 Ensemble 14 (アンサンブル・フィアツェン)

辻秀幸先生のもとでJ.S.バッハのカンタータを歌うアマチュア合唱団。1998年8月結成。  
ソリストは団内から選出し、プロのオーケストラ(現代楽器)と共演する演奏スタイルで、東京周辺にて活動。

- 1999年4月 マタイ受難曲の抜粋演奏(ピアノ伴奏)に、「マタイを歌う会」とともに出演  
(日本基督教団奥沢教会)
- 1999年9月 第1回演奏会 カンタータ第150番、第156番、第106番  
(ルーテル市ヶ谷センター)
- 2000年4月 マタイ受難曲の全曲演奏に第2コーラスとして出演  
(日本基督教団田園調布教会)
- 2000年9月 第2回演奏会 カンタータ第196番、第131番、第182番  
(神奈川県民ホール小ホール)
- 2001年3月 第3回演奏会 カンタータ第22番、第48番、第23番  
(すみだトリフォニーホール小ホール)
- 2001年9月 第4回演奏会 カンタータ第1番、第27番、第140番  
(川口総合文化センターリリア音楽ホール)
- 2002年3月 第5回演奏会 カンタータ第36番、第61番、ミサ曲ト短調  
(三鷹市芸術文化センター風のホール)
- 2002年9月 第6回演奏会 カンタータ第5番、第47番、第70番  
(四谷区民ホール)
- 2003年5月 第7回演奏会 ヨハネ受難曲  
(津田ホール)
- 2004年3月 第8回演奏会 カンタータ第17番、第44番、第139番、モテット BWV227  
(三鷹市芸術文化センター風のホール)

## Ensemble 14 メンバー

指揮者 : 辻 秀幸                      練習ピアニスト : 田城 章子  
代表 : 武内 崇史                      副代表 : 内藤 秀司 小林 尚弘  
練習指揮 : 小泉 孝博                  武内 崇史 北郷 博美 室橋 明美

Soprano 青瀧 憲子 赤木 詩子 木藤 裕子 子井野 真貴子 小林 総子  
崎谷 芳恵 高橋 磯美 浜崎 麗子 北郷 博美 湊 佳代 室橋 明美  
(岩倉 ひろみ 鹿島 晶子 加藤 かおり 川村 昌子 木下 純子 林 玲子)

Alto 柿原 紀子 木下 祐子 河野 昭子 小林 愛子 名倉 芳実  
(石井 彩子 大山 丘美 小林 朋子 鈴木 香奈 日向 典恵)

Tenor 江端 員好 北村 和也 小泉 孝博 内藤 秀司 中西 隆紀  
中原 浩一 室橋 義明 安河内 誠  
(羽田 耕太郎 山田 陽史)

Bass 加藤 正 木下 剛 菅野 松佐登 武内 崇史 林 秀博 三浦 貴博  
(太田 浩樹 小林 尚弘 佐藤 紀之 下平 泰裕 高尾 将嘉 壺内 克浩)

BWV.4 解説・対訳: T.Koizumi  
BWV.6 解説・対訳: A.Murohashi  
BWV.236 解説: T.Takeuchi  
プログラム作成: H.Hongo



### 一緒に歌いませんか

Ensemble14では一緒に歌って下さる方を随時募集しております。<< **アルト、ベース急募!**>>

バッハが大好きな方はもちろん、バッハが初めての方も歓迎です。

指導：辻 秀幸 先生 練習日：毎週土曜日(午前または午後)

練習場所：自由が丘、武蔵小杉など

お問い合わせ：北郷ほんごう(Tel : 090-2757-8167)

e-mail([info@ensemble14.org](mailto:info@ensemble14.org))

ホームページ：<http://www.ensemble14.org/>



### 第10回演奏会のご案内

2005年9月24日(土)

横浜みなとみらいホール 小ホール

J.S.BACH作曲 『マタイ受難曲』

後援

JCDA

日本合唱指揮者協会